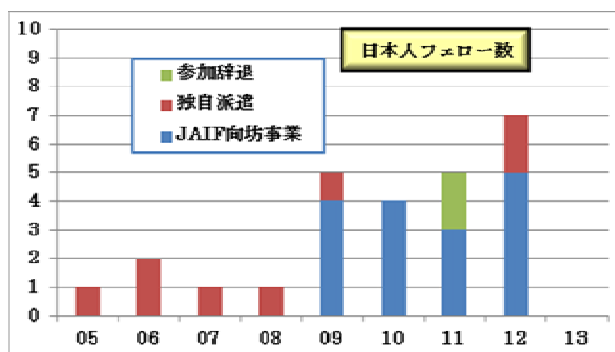


「スタート地点に並んだ、並走・抜けだしはこれからの挑戦」 世界原子力大学夏季研修参加2008年～2012年を振り返って

JAIF 小西 俊雄

- 「WNU夏季研修」の狙い、メンターの役割を知って、オタワでの研修(第4回、2008年)に初めてメンターとして参加してから4年間、その立場から日本の国際人材育成に力を注ぎたいと決意して勤めてきた。関係者にその実態を知ってもらう目的で、「WNU夏季研修紹介」のウェブサイトを立ち上げた。

- 折しも原産協会が「国際人材育成向坊事業」を立ち上げた。それまでは、東工大のCOEプロジェクトを中心に年に1 - 2名の参加だった日本からも、これを契機に毎年5名前後の参加が定着してきた。



- 日本人フェローは、とかく「様子見」から始まるパターンで、当初はおとなしさが目立っていた。他国フェローの印象に残る影も薄かった。しかし、参加者数が増えてコツが伝わるにつれ、個人・チームとしての勢いが出てきた。日本の原子力、文化の紹介も形になってきた。
- 今年の講師・メンターの声を見ても結構元気なフェローの姿が目に見え、欧米人フェローとの比較でも似た傾向をみる。「スタート地点に並んだか」と思える点である。研修で得たノウハウ、目線、心構えが個人財産に埋もれずに、横縦の仲間に伝わり広がり、全体の力となれば日本の原子力が「これからの並走、抜けだし、挑戦」に遅れずに済むであろうと期待したい。
- フェローだけではなく、メンター役や講師役も継続的に送り、世界の若者、これからのリーダーの目に日本の原子力の顔を見せることを原子力界全体が自分の問題として考えて欲しい。ドメスティックの目線・対処では「置いていかれる」。世界の雰囲気をも日本の国際人材育成に生かして欲しい。幸い、新しい日本人メンターが今年誕生した。さらに新しいメンター誕生も期待している。今年3名だった講師ももっと増えて良い。
- 原産協会の向坊事業による参加支援が効を奏してきていると感謝している。WNU夏季研修への参加は、今年のJNES2名に見るように、向坊事業と切り離して参加することも可能であり、むしろそれが本来の形である。関係機関におかれては自らの判断で若手の育成にフェローを送り出していただきたい。その応援を原産協会は喜んでするはずである。
- 本「WNU紹介ページ」冒頭にも書いたが、何れ近いうちにこのWNU夏季研修が日本でも開催される機会が訪れることを願っている。WNUではその立ち上げからリードしてきた米国J. Ritch氏が身を引き、あとをSwedenのVattenfall社元女性CEOが継ぐと聞いている。ここ数年見てきたWNU夏季研修はさらに中身の濃い場になるだろうと期待している。
- 振り返ってみて、メンターにも得るところの大きい夏季研修である。いい機会を持たたと関係者、各国フェローに感謝している。

(了)

